

「後にいる者が先になり」

ルカの福音書 13:22～30

はじめに

今日のタイトルはイエシュアの御言葉の中でも覚えやすい有名なフレーズです。これは一般的にも広く格言的に用いられたりもしていますが、神のご計画の視点において、これはイスラエルと教会についてのものと解釈されています。つまり先の者とはアブラハムの子孫であるイスラエルの民であり、後の者とは私たち異邦人の教会を指しているというわけです。イスラエルと教会、この両者に関するそれぞれの神のご計画が今日の箇所には神の国の奥義として秘められています。それがどのようなものなのかということを読み解いてまいりましょう。今日も真理の御霊がこれから後に起こることを私たちに教えてくださいますように。

1. エルサレムへの旅

ルカの福音書【新改訳 2017】

13:22 イエスは町や村を通りながら教え、エルサレムへの旅を続けておられた。

イエシュアの旅の目的地、それはエルサレムです。そこには二つの大きな目的、意味があります。一つは十字架にかかれ、死んで葬られ、すべての神の民の罪の贖いを成し遂げられるためです。そしてもう一つは終わりの日、イスラエルの残りの者と呼ばれるユダヤ人たちが「祝福あれ、主の御名によって来られる方に」とイエシュアに向かって叫ぶその時（マタイ 23:39）、天から下って来られ、イスラエルを再興、再建し、このエルサレムを聖都とした「神の国」を地上にお建てになるためです。これによって神のご計画は一旦の完成、完了となります。ですからこの記述は単なる状況説明、場面設定などではなく、神のご計画におけるエルサレムの重要性を預言的に指し示したものであり、この一文から始まる今日の内容がこのエルサレムに焦点を当てて理解する必要があることを示唆したものであることを覚えなければなりません。かつてこの場所はアドナイ・イルエ「主の山には備えがある」と呼ばれました（創世記 22:14）。まさに神である主は、このエルサレムにこそ目を留められ、そのご計画の完成「神の国」を準備し、備えておられるのです。そのようなわけで、終わりの日におけるエルサレム（神殿）についての神のご計画を指し示した「型、たとえ」として次の御言葉を捉えてまいりましょう。

2. 狭い門

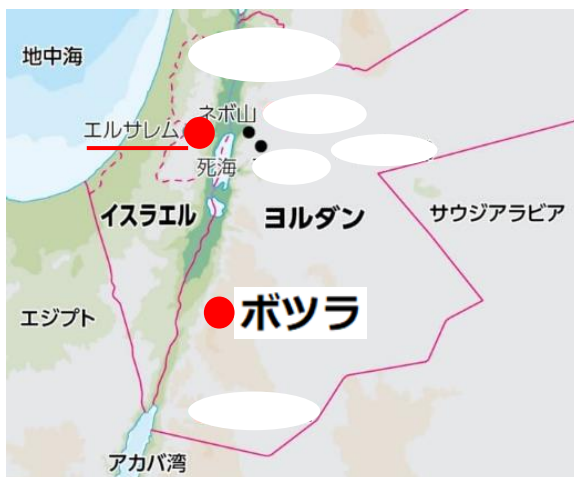
ルカの福音書【新改訳 2017】

13:23 すると、ある人が言った。「主よ、救われる人は少ないのですか。」イエスは人々に言われた。

13:24 「狭い門から入るように努めなさい。あなたがたに言いますが、多くの人が、入ろうとしても入れなくなるからです。」

「救われる人は少ないのですか」という問いかけに対し、イエシュアはこれを否定することなく「多くの人が、入ろうとしても入れなくなる」と答えられ、ここからイエシュアはまたたとえを用いて語り始め

られます。そしてまず「狭い門から入るように」と言われました。ではこの「狭い門」とはどのような門で、何を指し示しているのでしょうか。ここで「狭い」という意味で使われているヘブル語はツアル(צַר)と言いますが、この言葉は本来は「(アブラハムの) 敵」(創世記 14:20) という意味で使われ、その敵に追いつめられ、取り囲まれ、まさに「狭い」場所に八方塞に閉じ込められることを指し示した言葉なのです。終わりの日、イスラエルの残りの者と呼ばれるユダヤ人たちは「檻、囲い」という意味のボツラ(בִּצְרָה)の地(一般的にはペトラと呼ばれる)に逃げ込みます。ヘブル語で見るとその関連性は一目瞭然で、「敵、狭い」という意味のツアル(צַר)がボツラ(בִּצְרָה)という言葉の中にまるで閉じ込められているように表記されていることが見て取れます。ですからイエシュアの「狭い門から入るように」とは終わりの日、エルサレムを追い出されたユダヤ人たちがこのボツラに追いつめられ、まさにボツラく、没落の道を進むことを指し示しているのです。では彼らはなぜエルサレムを追い出され、また逃げ出すことになるのでしょうか。その理由が次にたとえられています。



3. 家の主人が立ち上がって

ルカの福音書【新改訳 2017】

13:25 家の主人が立ち上がって、戸を閉めてしまってから、あなたがたが外に立って戸をたたき始め、『ご主人様、開けてください』と言っても、主人は、『おまえたちがどこの者か、私は知らない』と答えるでしょう。

13:26 すると、あなたがたはこう言い始めるでしょう。『私たちは、あなたの前で食べたり飲んだりいたしました。また、あなたは私たちの大通りでお教えました。』

13:27 しかし、主人はあなたがたに言います。『おまえたちがどこの者か、私は知らない。不義を行う者たち、みな私から離れて行け。』

この「家の主人」とは誰でしょう。何を指すのでしょうか。「私たちは、あなたの前で食べたり飲んだり」とあるように、かつては良好な交わりを持った関係でした。しかし主人は「立ち上がって」とあります。ここに使われているクーム(קוּם)という言葉は本来、このような意味の言葉です。

創世記【新改訳 2017】

4:8 カインは弟アベルを誘い出した。二人が野にいたとき、カインは弟アベルに襲いかかって殺した。

カインとアベルはアダムとエバから生まれた双子の兄弟でした。まさにとともに食べたり飲んだりしていた家族だったのです。しかしある日突然カインはアベルにクーム「襲いかかって」殺してしまいました。殺されたアベルにとってこれは裏切り、欺き、騙し討ちとも言える行為でした。このようなことを「家の主人」は行ったというのです。終わりの日、イスラエルに対してこのようなことを行うのは獣、反キリスト以外にはいません。彼はイスラエルと固い契約を交わして友好的な関係を築きますが、その契約期間の途中でこれを破り、裏切ることが預言されているのです。

ダニエル書【新改訳 2017】

9:27 彼は一週の間、多くの者と堅い契約を結び、半週の間、いけにえとささげ物をやめさせる。忌まわしいものの翼の上に、荒らす者が現れる。

このように反キリストはイスラエルと「堅い契約」を結びますが、その期間の半ばでこれを破棄し、エルサレムの神殿、聖域を奪い取り、彼らの礼拝行為をやめさせ、自らを神としてそこに自身の偶像を建て、エルサレム神殿を「忌まわしいものの翼」つまり忌まわしい獣の偶像を拝む場所へと変貌させ、これを大いに汚すようになります。その為イスラエルの主を神とするユダヤ人たちは邪魔な存在となり、獣の神殿にとって彼らは「不義を行う者」と見られ、追い出されることになるというわけです。このようにクームとは裏切り、欺きを意味する言葉であり、エルサレムの神殿を奪い、イスラエルの「家の主人」へと取って代わる獣、反キリスト、その反逆の働きがここにはたとえられているのです。そしてこの「立ち上がる」クームについてもう少し説明を加えたいのですが、もう一度この初出箇所を見てください。

創世記【新改訳 2017】

4:8 カインは弟アベルを誘い出した。二人が野にいたとき、カインは弟アベルに襲いかかって殺した。

4:10 主は言われた。「いったい、あなたは何ということをしたのか。声がある。あなたの弟の血が、その大地からわたしに向かって叫んでいる。」

カインがアベルにクーム「襲いかかって殺した」その結果、「声がある。あなたの弟（アベル）の血が、その大地からわたし（主）に向かって叫んでいる」ということが引き起こされました。つまりクームによって地から主を呼び、主に叫び求める声が起こされたのです。自らを神とし、神殿を汚し、ユダヤ人を滅ぼそうとする反キリストの行為そのものは確かに悪しき忌むべきものです。しかしそれによってイスラエルの残りの者が主の御名、イエシュアの御名を呼び求めるようになることは主イエシュアの地上再臨を引き起こし、そこから反キリストの滅亡、イスラエル王国の再興そして「神の国」へと神のご計画を一気に完成へと導く非常に重要かつ必要な働きなのです。それはパリサイ人や律法学者たちの殺意、イスカリオテ・ユダの裏切りがなければイエシュアの十字架の死という贖いの御業が成し得なかったことと同じです。つまり「家の主人が立ち上がって」という反キリストのクームには、選びの民であるイスラエルに主の御

名を呼び求めさせるという意味があるということです。こうしてユダヤ人はエルサレムから締め出され、イスラエルの残りの者が先ほどの「狭い門」にたとえられたボツラへと逃げ延びることになるのです。

4. 天の御国

ルカの福音書【新改訳 2017】

13:28 あなたがたは、アブラハムやイサクやヤコブ、またすべての預言者たちが神の国に入っているのに、自分たちは外に放り出されているのを知って、そこで泣いて歯ざしりするのです。

13:29 人々が東からも西からも、また南からも北からも来て、神の国で食卓に着きます。

地上でイスラエルの残りの者が反キリストに追われ、エルサレムの「外に放り出されて」ボツラに追い詰められて嘆く時、ほぼ同時進行でもう一つのしるし、もう一つの奇蹟が天において起こります。それが「アブラハムやイサクやヤコブ、またすべての預言者たちが神の国に入って」そして「人々が東からも西からも、また南からも北からも来て、神の国で食卓に着きます」という預言に表されています。これを理解するためには、同じ表現が使われている以下の箇所を見る必要があります。

マタイの福音書【新改訳 2017】

8:5 イエスがカペナウムに入られると、一人の百人隊長がみもとに来て懇願し、

8:6 「主よ、私のしもべが中風のために家で寝込んでいます。ひどく苦しんでいます」と言った。

8:7 イエスは彼に「行って彼を治そう」と言われた。

8:8 しかし、百人隊長は答えた。「主よ、あなた様を私の屋根の下にお入れする資格は、私にはありません。ただ、おことばを下さい。そうすれば私のしもべは癒やされます。

8:9 と申しますのは、私も権威の下にある者だからです。私自身の下にも兵士たちがいて、その一人に『行け』と言えば行きますし、別の者に『来い』と言えば来ます。また、しもべに『これをしろ』と言えば、そのようにします。」

8:10 イエスはこれを聞いて驚き、ついて来た人たちに言われた。「まことに、あなたがたに言います。わたしはイスラエルのうちのだれにも、これほどの信仰を見たことがありません。

8:11 あなたがたに言いますが、多くの人が東からも西からも来て、天の御国でアブラハム、イサク、ヤコブと一緒に食卓に着きます。

8:12 しかし、御国の子らは外の暗闇に放り出されます。そこで泣いて歯ざしりするのです。」

自分のしもべが病気になり、その癒しを求めてイエシュアのみもとにやって来た一人のローマ人の百人隊長、この出来事は異邦人がその信仰をイエシュアに認められ、賞賛されるというものですが、ここに神のご計画の一つの「型」が存在します。それはこのローマ人がイエシュアを自分の家に迎えることなく御業が現れたという事実にあります。主イエシュアはやがて天からこの地に来られる御方です。その御方があえて来られるその途中で、つまり天から降られ、しかし地に来られることなく御業が現れること、それは主ご自身が天から降って来られ、空中で行われる携拳の事実を指し示しているのです。「『行け』と言えば行きますし…『来い』と言えば来ます。しもべに『これをしろ』と言えば、そのようにします。」という百

人隊長の言葉もまた御使いたちによって私たち異邦人の教会を空中に集めるその事実を指し示しており、これこそまさに「**イスラエルのうちのだれにも、これほどの信仰を見たことがありません**」と言われた、イスラエルのうちには成就しない、イエシュアを信じる異邦人の上に現れる神の御業、ご計画です。

I テサロニケ人への手紙【新改訳 2017】

4:16 すなわち、号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られます。そしてまず、キリストにある死者がよみがえり、

4:17 それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うのです。こうして私たちは、いつまでも主とともにいることとなります。

「号令…ラッパ」携拳の奇蹟はまるで軍隊の召集のようにも見受けられ、これがローマ人の百人隊長という存在とも見事に結びつきます。このような形でイエシュアの空中再臨、携拳の事実が表された箇所結びとして「**多くの人が東からも西からも来て、天の御国でアブラハム、イサク、ヤコブと一緒に食卓に着きます。…しかし、御国の子らは外の暗闇に放り出されます。そこで泣いて歯ざしりするのです**」という同様のフレーズが使われているのですから、これが携拳を指し示したものであることは明白です。イエシュアは「神の国」をこの地にお建てになります、それは本来、天にあるものであり、すなわち「天の御国」なのです。それがこの地に来るからこそ私たちは「御国が来ますように」と祈るのです。

またこれは少し余談になりますが、「**東からも西からも、また南からも北から**」も、すなわち全世界から集められる私たち異邦人の教会とは別に「天の御国」には「**アブラハムやイサクやヤコブ、またすべての預言者たち**」と表されている旧約時代の聖徒たちの存在も見られます。彼らは私たち教会よりも先に天に引き上げられた者たちです。そしてそれはいつの時であったかと言いますと、イエシュアが十字架にかかれ、死んで葬られ、三日目に墓から出て来られた時にまで遡ります。

マタイの福音書【新改訳 2017】

27:50 しかし、イエスは再び大声で叫んで霊を渡された。

27:51 すると見よ、神殿の幕が上から下まで真っ二つに裂けた。地が揺れ動き、岩が裂け、

27:52 墓が開いて、眠りについていた**多くの聖なる人々の**からだが生き返った。

27:53 彼らは**イエスの復活の後で、墓から出て来て聖なる都に入り、多くの人に現れた。**

このように「**アブラハムやイサクやヤコブ、またすべての預言者たち**」をはじめとする「**多くの聖なる人々**」旧約の聖徒たちはこの時点でよみがえらされました。旧約時代の人々です。遺体はもはや骨と化していたでしょう。つまり単に生き返ったのではなく、イエシュアと同様に朽ちない身体を与えられてよみがえったのです。しかし書いてあるとおり「**イエスの復活の後で、墓から出て来**」ました。使徒パウロはこれを見てイエシュアは「よみがえりの**初穂**」となられたと書いていますが（I コリ 15:20）、初穂とはそもそも一本の穂のことではなく、一オメルすなわち集められた「一束」を意味します（レビ 23:10）。ですから過越の祭の後に行われる「初穂の祭り」の規定に則るならば、祭司としてイエシュアは、よみがえらされた旧約の聖徒たちを集め束ねてこれを初穂の束として父なる神にささげられたというのが「よみがえ

りの初穂」としてのイエシュアについてのイスラエ尔的な解釈です。そもそも初臨とはいえ、満を持して神の御子が暗闇の支配の中に乗り込んで行ったというのに、何も奪い返さず、単身手ぶらで天に帰るなど、それでは凱旋どころかまるで敗走です。イエシュアはそれまで死とよみに捕らわれていた旧約の聖徒たちを十字架の死と復活の御業をもってこれを見事奪い返したのです。まさに「あなたは、捕虜を引き連れて、いと高き所に上り（詩 68:18）」と書いてあるとおりです。ですから彼ら旧約の聖徒たちは今現在、天にある「聖なる都」に入っており、やがて私たち教会の携拳の際、私たち「多くの人に現れ」してくれることとなります。その成就を表したものが「多くの人が東からも西からも来て、天の御国でアブラハム、イサク、ヤコブと一緒に食卓に着きます」というイエシュアの御言葉です。またさらに言うのであれば、この中には携拳の後に始まる大患難時代の中で殺される殉教者たち「だれも数えきれないほどの大勢の群衆（黙 7:9）」もここに含まれてきますので、本当に「多くの人」が旧約の聖徒たちと天上にて相まみえることとなります。

さて話を戻します。先に述べたように、反キリストに神殿を乗っ取られ、エルサレムを追われるユダヤ人たち、イスラエルの残りの者は「狭き門」であるボツラに行くことが定まっていますから携拳されることがなく「天の御国」に入ることはありません。それが「しかし、御国の子らは外の暗闇に放り出されます。そこで泣いて歯ぎしりするのです」、「自分たちは外に放り出されているのを知って、そこで泣いて歯ぎしりするのです。」というたとえの意味なのです。しかし絶対に誤解しないでいただきたいことは、イスラエルの残りの者は御国に入れない、神の国に入れず滅びるということではないということです。なぜなら今日の結論はこうあるからです。

5. はじめてあり終わりである方

ルカの福音書【新改訳 2017】

13:30 いいですか、後にいる者が先になり、先にいる者が後になるのです。」

このように、イエシュアはその救い御業を行う順番、順序について述べているのであり「後にいる者」が救われ、「先にいる者」が滅びると教えておられるのではありません。イスラエルも、私たち異邦人の教会もどちらも必ず救われます。ただその順番とプロセスがそれぞれ異なっていることがここで述べられているのです。イエシュア(יֵשׁוּעַ)とは「主は救い」という意味の名です。その御方がご自身を指してこう言っておられます。

イザヤ書【新改訳 2017】

44:6 イスラエルの王である主、これを贖う方、万軍の主はこう言われる。「わたしは初めであり、わたしは終わりである。わたしのほかに神はいない。

ヘブル語では「先にいる者」も「初めであり」も同じローシュ(רִאשׁוֹן)という言葉が使われており、同様に「後にいる者」「終わりである」もともにアハル(אַחֲרָיִם)です。つまりイエシュアが初めであり、終わりであ

るとは、「先にいる者」も「後にいる者」主はお救い下さるという意味であり、すなわちイスラエルも教会も救われ、ともに「神の国」に入るといふそのご計画がここには明示されているのです。

では最後に、ボツラへと没落、の道を進んだ「先にいる者が後になる」とたとえられたイスラエルの残りの者がどのようにして救い出されるのかを見ておきましょう。

イザヤ書【新改訳 2017】

34:1 国々よ、近づいて聞け。諸国の民よ、耳を傾けよ。地とそこに満ちているものよ、聞け。世界とそこから生え出たすべてのものよ。

34:2 主がすべての国に向かって激しく怒り、そのすべての軍勢に向かって憤り、彼らを聖絶し、虐殺されるにまかされたからだ。

34:6 主の剣は血で満ち、脂肪で肥えている。子羊とやぎの血、雄羊の腎臓の脂肪で。主がボツラでいけにえを屠り、エドムの地で大虐殺をされるからだ。

34:8 それは主の復讐の日であり、シオンの訴えのために仇を返す年だからだ。

その日、反キリストとそれに従う「諸国の民」はイスラエルの残りの者を「ボツラ」に追い詰めます。八方塞となったイスラエルに絶体絶命の危機が訪れますが、「それは主の復讐の日であり、シオンの訴えのために仇を返す年だ」と預言されています。つまりイスラエルの王なるメシアとして主イエシュアはここボツラの地に再臨され、このように獣の軍勢に対し「聖絶」「大虐殺」を行われ、そうしてイスラエルを救い出されるのです。それゆえ地上再臨されるイエシュアについてこう預言されています。

イザヤ書【新改訳 2017】

63:1 「エドムから来るこの方はだれだろう。ボツラから深紅の衣を着て来る方は。その装いには威光があり、大いなる力をもって進んで来る。」「わたしは正義をもって語り、救いをもたらす大いなる者。」

63:3 「わたしはひとりですどう踏みをした。諸国の民のうちで、事をともにする者はだれもいなかった。わたしは怒って彼らを踏み、憤って彼らを踏みじった。彼らの血の滴りはわたしの衣にはねかかり、わたしの装いをすっかり汚してしまった。

63:4 復讐の日がわたしの心のうちにあり、わたしの贖いの年が来たからだ。

このようにしてイスラエルの残りの者に対する救い、「贖いの年」は訪れることとなります。「わたしはひとりでどう踏みをした。諸国の民のうちで、事をともにする者はだれもいなかった」とあるように、これらすべてをイエシュアご自身がただお一人で行われ、成し遂げられ、これらの預言を成就なさいます。それはイエシュア・ハマシア、ただこの御方だけがほめたたえられ、この御方だけにすべての栄光が帰されるため、主の御名だけがあがめられるためです。しかし今日、イエシュアのこの救いに与るはずのイスラエルはまだこの事実を知りません。本来は後にいる者でありながら、先にいる者とされた私たち教会だけが今日この真理に目が開かれています。ですから彼らの目が開かれるその日まで、私たちだけが主の御心を祈ることができます。主イエシュアお一人に目を向け、その御名を呼び求め、ひたすらに祈ってまいりましょう「主イエシュアよ、来てください」と。